

青年期女子の過剰適応を規定する親子関係の諸要因について

—Masterson, J. F. の理論を踏まえて—

Predictors of over-adaptation among adolescent women from the viewpoint of parent-child relationship
—Based on J.F.Masterson's theory—

霞 麻紗子

Masako Kasumi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 過剰適応, 親の養育態度, 重荷に感じた親からの期待, 愛情撤去, 愛情供給

Key words : Over-adaptation, Parental attitudes, Parental expectations as a heavy load, WORU, RORU

1. 問題・目的

日常生活において他者から見て環境適応的な人の中に、実は自分を抑えて過剰な努力をして他者に適応する人がいる。このように「環境からの要求や期待に完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも外的な期待や要求に応える努力を行うこと」を過剰適応という(石津, 2006)。過剰適応の規定要因として親の要因が多く研究され、勝田(2009)は親の養育態度・親からの期待・過剰適応との関連について、一貫しない養育態度の場合に親からの期待が高いと過剰適応傾向が高くなることを示唆した。

過剰適応の規定要因に見捨てられ不安がある。Masterson, J. F.(1980)は、境界性パーソナリティ障害(Borderline Personality Disorder)の基本的な障害は、分離—個体化期にあたる生後 18~24 ヶ月の子どもの母親の関わりで生じる見捨てられ不安に由来するとした。この時期に、子どもが過剰に母親に固執したり母親が子どもの自立を妨げる行動に出た場合、子どもの心の中で母親との関わりが、(a)母親の言う通りにしないと愛情を撤去される関わり(愛情撤去型対象関係部分単位:Withdrawing Object-Relation's part Unit ; WORU と略す)と、(b)母親の言う通りにすれば愛情が供給される関わり(愛情供給型対象関係部分単位:Rewarding Object-Relation's part Unit ; RORU と略す)に分裂するとした。Masterson は BPD の病因に幼少期の親子関係を挙げた(磯田, 2001 ; 淵, 2004)。境界例では、この WORU RORU の対象関係が母親以外の重要な他者にも同様に生じると考えられる。

ところで、BPD の臨床群ではないが、WORU RORU に近い対象関係を持つ人、つまり WORU RORU 的傾向の人が過剰適応者の中にいるのではないか。勝田(2009)により、一貫しない親の養育態度を受け親からの期待を強く感じると過剰適応する者が健常群にいたことが明らかとなった。このような人の中に、親からの期待を実際は重荷に感じているが、期待に応えないと愛情を撤去されてしまうと感じ、期待に沿う過剰適応的行動を取る心理を持つ人が存在する可能性がある。これは WORU RORU 的傾向といえるだろう。しかし、過剰適応と WORU RORU の関連を調査した研究は未だなく、実態が明らかにされていない。本研究では、青年期女子における中学生までの親の養育態度・高校生での親からの期待を重荷に感じる程度・現在の過剰適応傾向の関連を明らかにする(目的 1)。さらに親からの期待を重荷に感じて過剰適応する群は WORU RORU 的傾向が高いと想定し、過剰適応の生起過程、特に、WORU RORU 的傾向が存在するかを明らかにする(目的 2)。

2. 方法

研究 1

A 女子大学生 145 名(平均 20.92 歳, $SD=0.95$)に対して、過剰適応を測定する青年期前期用過剰適応尺度(石津, 2006)、養育態度を測定する Parental Bonding Inventory(PBI)日本語版(小川, 1994)、重荷に感じた親の期待を測定する親からの期待尺度(春日・宇都宮, 2011)から構成される質問紙を実施した。

研究 2

研究 1 の結果から、親の期待を重荷に感じる程度と過剰適応傾向がともに高く、且つ、研究 2 の調査協力に同意が得られた計 2 名(A,B とする)に、半構造化インタビュー調査を行った。また対象者に許可を得て、内容を IC レコーダーを用いて録音した。調査には 1 時間であった。調査終了後、謝礼を渡した。分析は KJ 法と CCRT 法を参考とした。それにより、①過剰適応エピソードの抽出、②「何が起きていてそれに対して自分がどのように感じて行動したら」「相手がどう行動して」「それに対して自分はどうか感じたか・どう行動したか」という観点から、過剰適応と WORU RORU の構造の共通性についての比較検討をおこなった。

3. 結果と考察

研究 1

因子分析の結果、親の養育態度は、養護(独立支持)と過保護(独立障害)の 2 因子構造であり、重荷に感じた親からの期待は、教育・就職期待と人間性期待の 2 因子構造であった。さらに、過剰適応は外的適応と自己抑制と自己不全感の 3 因子構造であった。また、重回帰分析を行い、親の養育態度が重荷に感じていた親からの期待を介して過剰適応に及ぼす影響について検討した結果、中学生までに過保護的な親の養育態度を受けていたほど、高校生で親からの教育や就職への期待を重荷に感じる程度が高く、現在は他者に対して外的適応をして、自己抑制をしていることが明らかとなった。一方で、中学生までに過保護的な親の養育態度を受けていたほど、高校生で親からの人間性への期待を重荷に感じる程度が高いが、現在の他者に対する外的適応や自己抑制は低くなることが明らかとなった。

また、中学生までに親の養護的な養育態度を受けていたほど、現在は他者に対して外的適応をする傾向が高くなるものの、自己不全感が低くなることが明らかとなった。さらに、中学生までに親の過保護的な養育態度を受けていたほど、現在は他者に対して自己抑制し、自己不全感を抱えていることが明らかとなった (図 1)。

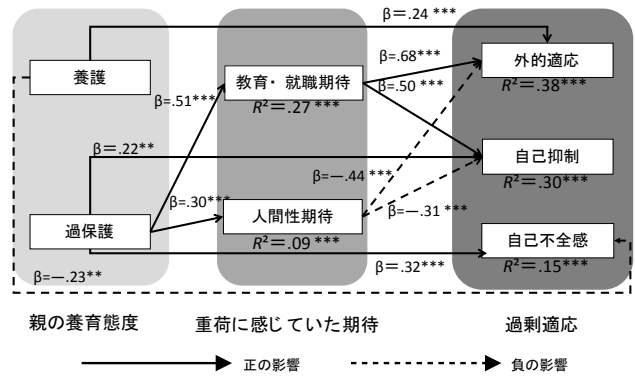


図 1. 親の養育態度が重荷に感じた期待を経て過剰適応に及ぼす影響についてのパスダイアグラム

研究 2

インタビュー調査のデータを基にした質的分析の結果、2名の対象者の過剰適応プロセスはどちらも、幼少期から親との間で生じていたことが明らかとなった。また、その体験が続くことで、自己の意思や欲求を抑制して親からの期待や要求に沿おうと努めていた。さらに親子関係の中で過剰適応することによって、その対人関係パターンが友人などの他者に対しても行われる場合があることが示唆された。そして、幼少期に最も身近な他者である両親から自身の主張を受容されないことが、過剰適応の生起要因と成り得ることが見出された(図 2)。

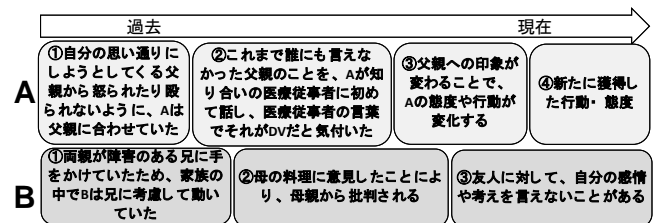


図 2. 対象者の過剰適応プロセス概略

さらに、過剰適応の構造と WORU RORU の構造を比較した結果、対象者 2 名はどちらも、「相手からの期待や自身に求められるイメージに即さない自己主張をしたことによって、相手からの期待と合わない」という状況が一致していた。そして、対象者は自身の行動や主張によって相手から怒られたり批判されるという体験をしていたが、それによって自分が見捨てられてしまったとは感じていなかった。つまり WORU RORU の基礎となる見捨てられ不安を感じておらず、期待に沿う行動は感情的苦痛を受けることを回避するために行われていたことが明らかとなった。そのため、本研究

の過剰適応傾向が高い対象者には WORU RORU の傾向があることは実証されなかった。

4. 今後の課題

本研究において、健常群の過剰適応者に WORU RORU 的傾向を見出すことの難しさや、調査対象者数が少なかったことが課題とされる。WORU RORU の重要概念である見捨てられ不安を質問紙調査において測定することで、より緻密な対象者選定を行えることが考えられる。また、これまで過剰適応の生起だけではなく、脱却の過程とその要因を明らかにすることによって、過剰適応者の援助に有用となると期待できるだろう。

主要参考文献

- [1] 石津憲一郎(2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.
- [2] Masterson, J. F. (1980). From Borderline Adolescent to Functioning Adult: The Test of Time. (マスターソン, J. F. 作田 勉・恵 智彦・大野 裕・前田 陽子(訳)(1982). 青年期境界例の精神療法——その治療効果と時間的経過—— 星和書店)

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成 DB2907「青年期女子の過剰適応を規定する親子関係の諸要因について」を受けて行ったものである。